
着物の少女

2Ch

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

着物の少女

【Nコード】

N9126K

【作者名】

2Ch

【あらすじ】

俺は小さい頃に山で着物姿の女の子に出会った。祖母の家に行く時は、その女の子と毎日遊んだ。

(前書き)

この話を知っている人も、最後まで読んでみて下さい

毎年の夏、俺は両親に連れられて祖母の家に遊びに行っていた。俺の祖母の家のある町は、今でこそ都心に通うベットタウンとしてそれなりに発展しているが、二十年ほど前は、隣の家との間隔が数十メートルあるのがざらで、田んぼと畑と雑木林ばかりが広がるかなりの田舎だった。

同年代の子があまりいなくて、俺は祖母の家に行くと、いつも自然の中を一人で駆け回っていた。それなりに楽しかったのだが、飽きることもままあった。

小学校に上がる前のこと。

俺は相変わらず一人で遊んでいたが、やはり飽きてしまっていたものは行かなかった山の方へ行ってみることにした。

祖母や親に、山の方は危ないから行っちゃダメと言われていて、それまで行かなかったのだが、退屈にはかなわなかった。

家から歩いて山の中に入ると、ちょっとひんやりしていて薄暗く、怖い感じがした。

それでもさらに歩いていこうとすると、声をかけられた。

「一人で行っちゃだめだよ」

いつから居たのか、少し進んだ山道の脇に、僕と同じくらいの背丈で髪を適当に伸ばした女の子が立っていた。

その子は着物姿で、幼心に変わった子だなと思った。

「なんで駄目なの？」

「危ないからだよ。山の中は一人で行っちゃだめだよ。帰らなきゃ」
「嫌だよ。せっかくここまで来たんだもん。戻ってもつまらないし」

俺はその子が止めるのを無視していこうとしたが、通りすぎようとしたときに手をつかまれてしまった。

その子の手は妙に冷たかった。

「……なら、私が遊んであげるから。ね？ 山に行っちゃだめ」

「えー……うん。わかった……」

元々一人遊びに飽きて山に入ろうと思い立ったので、女の子が遊んでくれると言うなら無理に行く必要もなかった。

その日から、俺とその女の子は毎日遊んだ。

いつも、出会った山道のあたりで遊んでいたので、鬼ごっことか木登りとかがほとんどだった。

たまに女の子がお手玉とかまりとかを持ってきて来て、俺に教え込んで遊んだ。

「健ちゃん、最近何して遊んでんだ？」

「山の近くで女の子と遊んでる」

「女の子？ どの子だ？」

「わかんない。着物着てるよ。かわいいよ」

「どこの子だろうなあ……。名前はなんつうんだ？」

「……教えてくれない」

実際その子は一度も名前を覚えてくれなかった。

祖母も親も、その子がどこの子かわからないようだった。

とりあえず村のどっかの家の子だろうと言っていた。

その夏は女の子と何度も遊んだけど、お盆を過ぎて帰らなきやならなくなった。

「僕明日帰るんだ」

「そうなんだ……」

「あのさ、名前教えてよ。どこに住んでるの？ また冬におばあちゃんちに遊びに行くから」

女の子は困ったような何とも言えない顔をしてうつむいていたが、何度も頼むと口を開いてくれた。

「……名前は○○。でも約束して。絶対誰にも私の名前は言わないでね。……遊びたくなったら、ここに来て名前を呼んでくれればいいから」

「……わかった」

年末に祖母の家に来た時も、僕はやはり山に行った。

名前を呼ぶと、本当に女の子は来てくれた。

冬でも着物姿で寒そうだったが、本人は気にしていないようだった。

「どこに住んでるの？」

「今度僕のおばあちゃんちに遊びに来ない？」

などと聞いてみたが、相変わらず首を横に振るだけだった。

そんな風に、祖母のうちにいった時、俺はその女の子と何度も遊んで、それが楽しみで春も夏も冬も、祖母の家に長く居るようになった。

女の子と遊び始めて三年目、俺が小二の夏のことだった。

「多分、もう、遊べなくなる……」

いつものように遊びに行くと、女の子が突然言い出した。

「何で？」

「ここに居なくなるから」

「えー、やだよ……」

引っ越しか何かで居なくなるのかなと思った。

自分が嫌がったところでどうにかなるものでないときすがにわかっていたが、それでもごねずには居られなかった。

「どこ行っちゃうの？」

「わからないけど。でも明日からは来ないでね……もうさよなら」

本当にいきなりの別れだったので、俺はもうわめきまくりで、女の子の前なのに泣き出してしまった。

女の子は俺をなだめるために色々言っていた。

俺はとにかく、また遊びたい、さよならは嫌だと言い続けた。

そのうち女の子もつうつと涙を流した。

「……ありがとう。私、嬉しいよ。でも、今日はもう帰ってね。もう暗いし、危ないからね」

「嫌だ。帰ったら、もう会えないんでしょ？」

「……そうだね……」

あなたと一緒にいいのかもね」

「え？」

「大丈夫。多分また会えるよ……」

俺はさとされて家路についた。

途中何度も振り向いた。

着物の女の子は、ずっとこちらを見ているようだった。

その日、祖母の家に帰ったらすぐに、疲れて寝に入ってしまった。

そして俺は、その夜から五日間、高熱に苦しむことになった。この五日間のことは、俺はほとんど覚えていない。

一時は四十度を越える熱が続き、本当に危なくなつて、隣の町の病院に運ばれ入院したが、熱は全然下がらなかつたらしい。しかし、五日目を過ぎると、あつさり平熱に戻つていたという。

その後、祖母の家に戻ると、驚いたことに俺が女の子と遊んでいた山の麓は、木が切られ山は削られ、宅地造成の工事が始まつていた。

俺は驚き焦り、祖母と両親に山にまでつれて行つてくれと頼んだが、病み上がりなのでつれていってもらえなかつた。

それ以来俺は、女の子と会うことはなかつたが、たまに夢に見るようになった。

数年後聞いた話に、宅地造成の工事をやった時、麓の斜面から小さく古びた社が出てきたらしいというものがあつた。

工事で削った土や石が降つたせいかな、半壊していたという。何を奉つていたのかも誰も知らなかつたらしい。

その社があつたのは俺が女の子と遊んでいた山道を少し奥に入っ

たところで、ひょっとして自分が遊んでいたのは……と思っていたしまった。

実際変な話がいくつかある。

俺の高校に自称靈感少女がいたのだが、そいつに一度、

「あんた、凄いのつけてるね」
と言われたことがあった。

「凄いのってなんだよ？」

「……わかんない。けど、守護霊とかなのかな？ わからないや。
でも、怪我とか病気とかあまりしないでしょ？」

確かにあの高熱以来、ほぼ完全に無病息災だった。

さらにこの前、親戚の小さな子（五才）と遊んでいたら、その子がカラーボールを使ってお手玉を始めた。

俺にもやってみろと言う風にねだるので、やってみると、対抗するかのようにくつもボールを使ってお手玉をした。
何度も楽しそうにお手玉をした。

あんまり見事だったので後でその子の親に、

「いやー、凄いよ。教えたの？ あんな何個も、俺だってできないよ」

と言うと、親はきよんととして、

「教えてないけど……」

と答えた。

もう一度その子にやらせてみようとする、何度試してもできなかった。

「昼間みたいにやってみて」

「? なにそれ?」

と言う感じで、昼のことをおぼえてすらいなかった。

何と言うか、そのお手玉さばきは、思い返すとあの女の子に似ていた気がしてたまらない。

今もたまに夢に見るし、あの言葉もあるし、ひょっとしてあの子は本当に俺にくっついていいるのかなと思ったりする。

ちなみにその女の子の名前は、なぜか俺も思い出せなくなってしまっている。

不気味とかそういうのはなく、ただ、懐かしい感じがするのみである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9126k/>

着物の少女

2011年10月6日17時15分発行